

くらし

錦織監督

映画の現場から



●●11

しまね映画祭が今年、20年目を迎える。一口に20年といってもオギャーと生まれた赤ん坊が成人になるわけだから大したものだ。

私自身のしまね映画祭とのご縁は、11年前に「守ってあげたい!」の上映の際、ゲストでしまね映画祭頓原会場にお邪魔して以来。

1回目から「環境」をテーマに開催されてきた、日本一、会期の長い映画祭。映画館がほとんどない島根で、スクリーンで観(み)ることが出来る映画鑑賞の機会を提供して来たしまね映画祭の取り組みにあらためて敬意を表したい。

映画上映に限ったことではないが、催しもの(イベント)などをやると何人来場した、とかの「数字」だけが評価の対象になりが

良いものを地道に提供

ちだ。もちろん多くの方の支持を得ることはとても重要なことであり、大事なこと。評価しなければならぬ。が、しかし、そこに「観客が入るもの」「良いもの」という錯覚が生まれ、それだけが評価の対象になると違ってくる。

数字的に振るわなかったりする、開催する側が「観客にうけそうなもの」や「数字が取れそうなもの」に走ってしまい、継続からしか生まれない文化活動がなくなる危険性がある。文化、というと固くなってしまって恐縮だが、何でも数字で評価されがちな現代では、即効性のあるパフォーマンス優先の企画が多くなり、そのうち受け止める側(本物がわかる観客)がいなくなっていく、本物が廃れてしまうのではないか。

本当に良いものはずいぶんは評価されないことが多い。そういった意味でも、いふし銀のこだわりを持った職人や経営者、お祭りなどの伝統を守り継いでいる地域の人たちの多くは残る島根にあって、しまね映画祭は、極めて島根らしい映画祭ではないかと思う。良いものを地道に作り、良いことを地道に続けていくことが島根らしさだと思う。

しまね映画祭の取り組みに、「文化活動に近道なし」ということをあらためて痛感する。皆さまにも、ぜひこの機会にスクリーンで映画をご覧いただけると幸いである。



「しまね式」映画祭こそ島根らしさの真骨頂!

10日から11月20日まで開催される「しまね映画祭2011」のポスター

(錦織良成・映画監督)

— 第2、4金曜掲載 —